

クラシック音楽祭の鑑賞経験が中学生にもたらす効果

——サイトウ・キネン・フェスティバル松本に関する調査の分析①——

中京大学 相澤真一

1 目的

本報告の目的は、クラシック音楽祭に招かれている中学生を対象とした調査を行うことにより、質の高い音楽を受容する経験が中学生にどのような効果をもたらしているのかを検討することにある。

近年、文化芸術に携わる立場の人々が博物館や美術館で子どもたちにワークショップを開催するなどのアウトリーチ活動が増えている。この流れは、1990年代後半から2000年代の教育政策において、「意欲・関心・態度」を含めて評価する「新学力観」あるいは総合的な学習や職場体験など、体験的な学習経験を重視する「教育改革」が推進されてきた流れと親和的なものである。

これまで、教育社会学の研究では、この「教育改革」を進めることに批判的な研究が提示されてきた一方（例えば、藤田 1994）、教育内容が抽象に回帰するのではなく、その後の進路や職業へのレリバンス（つながり）のある教育を行うことの意義を認める声も大きくなっている（例えば、本田 2009）。両者の立場を踏まえつつ、このような一流の芸術に触れる学習経験がどのような効果をもたらしているのか、その一端をクラシック音楽祭で行われた音楽鑑賞会に参加した生徒を対象とした調査から明らかにする。

2 方法

本報告では 2012 年の「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」における質問紙調査研究（研究代表：辻竜平（信州大学））の一つとして、中学生に対して行った質問紙調査データを用いた分析を行う。この調査は、サイトウ・キネン・フェスティバル松本で中学 1 年生を対象としたオペラ公演「青少年のためのオペラ」に参加した長野県内の約 60 ある中学校から 6 校を抽出して学校を通して配布する形で複数回行われた。第 1 回調査はこのオペラ鑑賞の前に、第 2 回調査はオペラ鑑賞直後に行った。さらに、2013 年 2 月に再度許可を得た学校にのみ調査票を送付し、第 3 回調査を行った。第 2 回までの調査では 1189 ケースを得ており、第 3 回までの調査では、2013 年 6 月 20 日時点で 596 ケースを得た。

3 結果と結論

第 2 回調査までを分析した結果、「物語や音楽に引きこまれた」生徒が 6 割近くいた一方、「居眠りをしてしまった」生徒も半数以上、見られた。また、1 日あたりのテレビの視聴時間が長い生徒ほど鑑賞中に飽きてしまった傾向が見られた一方、家庭で多くの本を所有していたり、文化的な財を所有している家庭ほど、「物語や音楽に引きこまれた」傾向が見られた。全体として、中学生自身が文化的に威信の高い活動としてクラシック音楽鑑賞やオペラを位置付けていることが明らかになった。

さらに、第 3 回調査を含めた分析を行ったところ、オペラへの興味・関心は鑑賞直後に有意に高まったものの、その興味・関心が半年後の調査では低下した傾向も見られた。

【付記】本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業「文化資本と社会関係資本の関連性：クラシック音楽祭参加者への調査によるアプローチ」（課題番号 23653121，挑戦的萌芽研究，研究代表：辻竜平（信州大学））の補助を受けた。

文献 藤田英典，1994，『教育改革』岩波書店。

本田由紀，2009，『教育の職業的意義』筑摩書房。